

知的障害者とキリスト教¹⁾

片 山 寛

1. はじめに

伝統ある神学部の開講講演でお話しをすることになりまして、非常に緊張しています。この開講講演というのは、神学部につとめている専任教員が、日頃の勉強の成果を発表するという意味合いを持っておりまして、それをもって新しい年度の様々な講義の手始めにするという主旨のものだと思います。

今回、私が開講講演を担当することになりましたのは、今年の2月に一冊の翻訳を新教出版社から出版いたしました²⁾、四日市教会の加藤英治牧師との「共訳」という形式なのですが、実際には翻訳の一番しんどい部分は加藤先生が引き受けてくださりまして、巻末の解説もしてくださっています。私はいよいよ楽をさせていただいたのですが、しかし本を出すぐらいだから、何か語ることがあるだろう、ということで私に白羽の矢があたったわけです。私も何か語ることができるだろうと考えて、安易にお引き受けしてしまったのですが、今さらながらに、このテーマの大きさと難しさに参っております。

この本は、フェイス・パウアーズさんというイギリスの女性が書かれた本であります。彼女はロンドンのブルームズベリー (Bloomsbury) ・セントラル・バプテスト教会という、ロンドン都心部の、大英博物館からほど遠からぬところにある大きな教会の会員で、教会関係の作家として活躍している

1) この論文は2017年4月6日に西南学院大学ドージャー記念館チャペルで行われた神学部開講講演会の内容の再録である。

2) フェイス・パウアーズ『知的障害者と教会 ― 驚きを与える友人たち』(片山寛・加藤英治訳) 新教出版社2017年。

方です。Baptist Quarterly という、本学の図書館にもバックナンバーがある雑誌にも、女性解放関係で、このバウアーズさんの論文が載ったことがありました。

これは彼女の教会における活動にも含まれますけれども、彼女は1983年に BUild, 「ビルト」, Baptist Union initiative with people with learning disabilities という団体を立ち上げて、「学習障害を持つ人々を支援するバプテスト連合」というのでしょうか、それ以降33年間、イギリスのバプテストの知的障害者のための活動を続けてきました³⁾。

彼女が知的障害者のための活動に入ったのは、彼女の次男のリチャード君が知的障害者だったからです。「ダウン症」という先天的な染色体の障害のために、彼は障害を持つことになりました。この本の中には、そのリチャード君を中心に、いろいろな知的障害者のことが載っております。彼らの生きがいの問題や、彼らの中の教会に通う人々への支援や、家族などの周囲の人々のことが具体的に書いてあります。特に、障害者施設を出て、地域のグループホームで暮らすようになった人々の様々な課題や、中には障害者同志で結婚をする決心をした男女を、教会の牧師や信徒の人々が支援して、結婚式にまで漕ぎつけた苦労話もあります。それは二人の両親を含めて、大きな喜びとなった出来事でした (147頁)。

私自身も、昔、福岡ベタニヤ村教会で牧師をしていたときに、測上さんという重度の身体障害者の方と、知的障害を持った方の結婚式を牧師として司式させていただいたことがありまして、その時のことを思い出しました。障害者への支援は、もちろん苦労もありますが、喜びも多くあります。測上さんの結婚は、それによって福岡ベタニヤ村教会が教会として元気になることができた、そういう経験でした。測上さんはもう亡くなったのですが、それはその後、教会が障害者のことを覚え、障害者の御一家を受け入れていくことにつながったと思います。この本には、キリスト教会が彼らを教会員とし

3) BUild は残念なことに 2016 年にメンバーの高齢化もあって活動を停止した。

て受け入れていくことの重要性と、それに伴う様々な課題、またそのことから得られる喜びについて書いてあります。

2. 癒し人としての知的障害者

この本を翻訳して強く感じさせられたことのひとつは、現代社会は知的障害者の存在によって強くチャレンジを受けている、ということでした。彼らは、私たちの現代社会が失ったもの、そしてどうしてもいつか回復しなければならぬものを教えてくれているように思うのです。それはキリスト教がこの世界で果たしていくべき使命と、重なってくるような何かであります。つまり彼らは、現代社会がかかっている「病氣」を癒す「癒し人」であるように思うのです。彼らは「医者」なのか、それともその病氣の「被害者」なのか、おそらくはその両方なのでしょうが、知的障害者を見るときに、私たちはその「病氣」の存在に気づくことができる。そのような存在なのだと思えます。

その「病氣」とは、「能力主義」という名前の病いです。現代の社会は社会全体がこの病氣に罹患しているのです。「病い」ではありますけれども、それは現代人にとって空気のように当たり前のことになっていて、日常的には意識することも難しいのです。つまり自分の能力というのは、自分に属するもので、自分のものなのだという思いこみがあります。能力こそ自分自身なのだ、と私たちは何の根拠もなく思っています。そしてそれが錯覚であることは、なかなか気づくことができません。しかも、「能力主義」は「病い」ではありますけれども、これを完全に取り払うことはできないし、取り払うことが人間にとって健康だというわけでもない。自分や自分の能力に対する誇りは、誇大妄想であっては困りますけれども、誰でも持っていていいし、持っていないければ困るものでもあります。一種のうぬぼれと、それと裏表になっている劣等感コンプレックス（アルフレッド・アドラー）と、それがあ

ができるのです。ですから、「能力主義」は病気ですけれども、私たちにできるのはただ、この病気の副作用を抑えつつ、病気とつきあってゆくしかない。そういうものです。

排除は不可能だけど、「病気」の一種だというその点では、それは「死」に似ています。死ぬ時が必ず来るということ、つまり私たちは皆、「死にいたる病」にかかっているというのは、私たちのすべてにとって必然であります。また一面では、それが私たちの人生に意味ももたらしてくれる。死があればこそ、私たちは必ずやって来るその日まで「力をつくし思いをつくして」努力し続けることができる。少し神学的に言うと、死があればこそ私たちは神さまに向かって、神さまを信じて希望を持って生きることができる。そう思います。ですから、人間が必ず死ぬというのは、それ自体は悪いことであり悲しいことでもありますけれども、それは広い目で見ると良いことでもあって、それがなくなってしまうと、もっと悪いことが起こってしまうと思うのです。「能力主義」も、それと似たところがあります。

近代以降の社会は全面的にこの「能力主義」という病気に依存して発展してきました。それを抜きにしたら、社会そのものが成立しないほどです。私たちが今、そこにいる「大学」という組織も、能力主義を前提しておりますし、大学こそ能力主義の牙城だとさえ言えます。新入生の皆さんは、入学試験に合格して、ここにおられるわけですが、それは皆さんが試験に合格するという能力を示されたからでありまして、大学が「能力主義」の原則に立っていることは明らかです。大学という機構は、いわゆる「学校制度」という、人をその能力で選別してゆくシステムの頂点に立っているのです。

私はキリスト教の歴史を研究している者なのですが、西欧の社会が、この学校という制度を社会の中心に据えたのが、おおまかに言えば「近代」という18世紀後半に始まる時代なのです。これが社会の中心だというのは、つまり基本的には学校教育によって、人々に職業配分や社会的地位を決定するという社会が始まったということなのです。日本ではこの「近代社会」というシステムが、西欧よりも1世紀ほど遅れて、19世紀の半ばに、明治維新に

よって取り入れられました。この近代産業と結びついた学校を中心としたシステムを、イヴァン・イリイチは「学校化社会」schooling society と呼びました。それは成績のいい子どもにとってはものすごく合理的な優れたシステムのように見えますが、それほどでもない大多数の人々にとっては、逃げ道があるようでない、息苦しい社会です。

近代以前の社会にももちろん「学校」はありましたけれども、「学校」が社会の中心ではなかった。学校以外にいくつもの要素があって、そちらの方が決定的な力を持っていたのです。

少し歴史に遡ってお話しするのを許していただきたいのですが、古代は、おおまかに言って、「血族」の時代でした。血のつながりが、社会の仕組みの根本をなしていたのです。人間が生きる上で、一番大きな要素は、誰の子どもに生まれてきたかということであり、どこの一族、どの民族に属するかということでした。支配的な民族に属する者は、最初から有利な立場にありましたが、支配される民族に属する者は苦しい立場にあり、時には奴隷となりました。それは近現代の奴隷制度、たとえば19世紀のアメリカにおける黒人奴隷制度や、20世紀のロシアの強制収容所ほど理不尽な、苛酷なものではありませんでした。近代の奴隷は本当に家畜なみの扱いでしたが、古代の奴隷は家族も持っておりまして、共同体も持つことができました。けれども、古代の奴隷たちも厳しい生活を強いられたことは間違いありません。

中世になると、この血のつながりに加えて、「身分」という第二の要素が登場してきます。身分とは、簡単に言えば「職業」です。ひとつの職業がありますと、その職業に属する人々の職業集団がありまして、「組合」、つまりギルドとかツunftと呼ばれるのですが、その職業集団がいろんなことを決定するようになりました。この同業者組合が、弟子たちをとってこれに職業教育をほどこしたのです。教育をする人々を「親方」master といいます。弟子たちを「徒弟」apprentice といいます。

私は大学の教授ですけども、中世には大学教授のことを magister、つまり master と言いました。学校教育の親方だったわけです。フランスのパリや、

イギリスのオクスフォードや、イタリアのボローニャで、私塾を開いていた親方たちが連合して、それに聖職者や修道院の修道士などが加わっていった。それが大学の母体になっています。

中世ふうの職業組合は今ではほとんどつぶれましたが、いくらか残っているものもあります。お医者さんたちの医師会とか、弁護士たちの弁護士会です。牧師も古い職業ですので、牧師会を持っておりますけれども、これは残念ながら少なくとも日本ではそれほど強い権力を持ってはおりません。

職業教育は近代的な学校教育とは違って、机を並べて授業を受けるのではありません。仕事をしながら、実地に、見よう見まねで親方から技術を学ぶのが基本です。親方のところに弟子入りをして、何年も仕事をしながら修行をして年季が開けると、独り立ちするのが許される。それは一概に否定さるべきものでもありません。今でも、牧師の教育は、昔ながらの徒弟教育の方がいい、と考える方もいらっしゃいます。ジョン・ヘンリー・ニューマン(1801-1890)は『大学の理念』という著作の中で、医学、法学、神学などには職業技能的学問という要素があり、職業的熟練 professional skill の要素があることを認めています⁴⁾。

ついでながら、職業組合とその教育機能というのは、現代においてはほとんど場所を失っていて、それが、現代において外国人を「技能実習生」として受け入れてもほとんど本来の意味をなさないで、ただ低賃金労働者に過ぎないということの底流にあります。

中世の「身分制度」というと、封建的な、悪いことばかりのように現代では言われるのですが、これが導入された時代には、ずいぶん人々を喜ばせたはずですよ。というのは、古代の血族社会とは違って、たとい血のつながりがなくても、いい親方に弟子入りして頑張って修行したら、出世できる可能性があったからです。そこに歴史上はじめて職業選択の自由が生まれました。

中世になっても、古代的な血族制度がなくなったわけではありません。中

4) John Henry Newman, *The Idea of a University*, ed. by F. M. Turner, Yale University Press 1996, p.109.

世の人々は、自分たちは古代の積み上げたものの上に乗っかっていると思っていました。近代は中世を否定して成立したのですが、古代と中世の間にはそういう意味での断絶はありません。中世社会というのは、古代以来の血族制と中世的身分制の併用であったと思いますが、血のつながりだけではなく、ということが大きかったと思います。この二つが組み合わされることによって、ある程度の社会的自由が生まれた。「自由の故郷は中世だ」と言われることがあるのですが、その理由の一つはこの身分制によるのです。

近代になって公的な制度として学校が登場したときに、人間はさらに自由になりました。近代の初めの学校は楽しかった。中世的な職業教育は厳しい封建的な修行でありましたが、学校では読み書きそろばんなどという、考えようによっては、ゲームのようなことをして、それでよくできる子は、近代的な産業に入って働くことができたのです。近代の始まった頃には、まだまだ中世的な血族制度や身分制度が強く残っておりましたから、学校は本当に、身分や血族の桎梏から人間を解放し自由を与える、社会の中の風透しであり、上へと吹き抜ける暖炉の煙突のようなイメージがあったと思います。

しかし近代が長く続き、血族制度や身分制度が本格的に壊されて公的なものではなくなくなっていくにつれて、学校制度はだんだん息苦しいものに変わってきました。上へと吹き抜ける風透しのよい煙突ではなくて、上へと狭まっていき、やがては人をがんじがらめに縛ってしまう、魚をとらえる罟（ヤナ）のようなものになってきたと思います。近現代においては血族制や身分制は否定されて、公的なものではなくなったのですが、消滅したのではなくて、むしろ「裏口」になってしまった。非公式の、昔よりも目に見えない、得体の知れない力として、私たちを縛るようになってきています。たとえば自由民主党の国会議員の約半分が、親兄弟といった親族から地盤を引き継いだいわゆる「世襲議員」になっておりますし、お医者さんの約25%が医者の子・娘であると言われます。学歴社会というのが、現代社会の表の顔で、裏では未だに古代さながらの血族社会であるかもしれない。古代の方がまだまともでありまして、古代はそれが表の社会でしたから、それなりのルールがあって、一族の長老たちの目というのがありますから、お金持ちだからと

いって好き勝手できたわけではない。それなりの社会的チェックが働いていたとも考えられるからです。

現在は、しだいに社会全体が閉塞感のただようものになっており、人々はその閉塞感を、テレビや映画のタレントや、アニメーション、コンピュータのゲームや、スポーツ選手といった、サブカルチャーの世界の幻にのめりこむことによってようやく晴らしていると言えるのではないのでしょうか。

本題に戻りますが、知的障害者は、そのような現代社会の閉塞に、風穴を開けてくれるような存在ではないだろうかと思えます。学校教育と結びついた能力主義、しかも実際には裏の抜け道だらけの、しかもその抜け道が一部の人々に独占されているような、形式的な能力主義社会が、人間にとってノーマルな社会ではないこと、知的能力のみではなく、もっと多様な「人間的な喜び」や「人間的なちから」(virtues)が何らかの仕方で評価される社会を作るべきであること、それがこの知的障害者を射程に入れて考えることによって、開かれるのではないのでしょうか。私はそのようなことを、ほんやりと夢のように考えているのです。

3. 聖書と知的障害者

そういうわけで、私は知的障害者を神学的にどう位置づけるべきか、という難問をこの『知的障害者と教会』という本から受け取ったわけですが、それに答えることは非常に難しいと言わねばなりません。なぜ難しいかというと、その一つの原因は、聖書の中には知的障害者のことが全く出て来ないということにあります。

この本の「まえがき」を私は書いておまして、それに「知的障害者の神学に向けて」という題をつけたのですが、「神学」という学問は——新入生の皆さんは、これからその「神学」という学びに入っていかれるわけですが——これは何と言っても聖書が出発点です。カール・バルト (1886-1968) という神学者は、説教するには二つのものが要だ、それは聖書と新聞だと言ったそうですが、聖書と現代という時代の対話、それが神学です。であり

ますから、聖書の中に答えが出て来ない問題については、私たちは答えを求めて困らざるをえないのです。もちろん、聖書は2000年前の書物ですから、聖書の中に出て来ない問題は、沢山あります。「資本」の問題とか「近代国家」の問題とか「情報」の問題とか、他にも沢山あるのですが、それにしてもこの知的障害者の問題について、聖書が沈黙しているのは、不思議に思えるのです。なぜなら、知的障害者は、2000年前の聖書が誕生した時代にも、いたはずだからであります。

特に旧約聖書には、知的障害者のみならず、障害者一般についても、ほとんど言及がない。レビ記21章に、身体に障害がある者は（祭司あるいはその助手として）神殿の儀式についてはならないとする箇所があるのと、後はサムエル記下にくつか、障害者に対する差別的な記述があるくらいです。サムエル記には旧約聖書では一人だけ、固有名詞のついた障害者が出てきます。メフィボシェトという名の、ヨナタンの息子で、両足の不自由だった人の話です。有名なダビデ王の先代の、サウルという王様の息子がヨナタンで、その子がメフィボシェトです。つまりメフィボシェトは王様の孫という恵まれた地位にありましたが、小さな頃の事故が原因で、両足が不自由だったのです。しかしある意味ではそのおかげでダビデ王の支配の下で生きのびることができた。そのような不思議な運命の子としてメフィボシェトは描かれています。いずれにせよ、旧約聖書には知的障害者は全く登場しません。

新約聖書にも、知的障害者は出てきません。イエス・キリストは聖書の中で多くの病人や障害者を癒しておられるので、障害者は目や耳の不自由な人とか、足が不自由で寝たきりの人とか、かなり出て来るのですが、知的障害者は一人も出て来ないのです。ただ一つ、マルコ福音書の9章（マタイ17章、ルカ9章）に、てんかんの子どもの癒しの物語がありまして、この子はものを言えず、耳も聞こえなかったと書いてあります。現代において、知的障害者で、てんかんの発作をも持っている方がかなりおられまして、私も昔、そういう方の介護をしたことがあって、それといくらか似ているようにも思われるのですが、もちろん、てんかんそのものは、知的障害ではありません。

なぜ聖書には、知的障害者についての言及がないのでしょうか。私は聖書

学の専門家ではないので、読み誤っている可能性もありますので、ご存じの方があつたら教えていただきたいのですが、ひとつの説明は、古代においては障害者であるなしにかかわらず、子殺しがごく普通であつたということです。生活が非常に厳しいわけですから、せっかく生まれても、とうてい暮らしていけない、育てていけない場合には、殺してしまふ。「子殺し」とか「子捨て」とか、日本では「口減らし」とも呼ばれる現象があつた。貧しい人々の場合には、それが当たり前のことであつた時代には、特に子どもが障害児として生まれた場合、その子が生き残るチャンスはほとんどないことになります。実際、出エジプト記の最初に、エジプトの王様が、お産の介助をする産婆さん、シフラとプアという二人の産婆さんに命じて、子どもが男の子なら殺せ、と命じる場面があります。これは障害者の殺害ではありませんが、産婆がそのような機能を持っていたことの傍証でもあります。もっともシフラとプアは、この王様の残酷な命令をサボタージュする勇敢な女性として描かれています。

日本でも、今から100年ぐらい前までは、産婆さんが、取り上げた子どもに障害があつた場合には、その子どもをその場ですぐ殺してしまつて、妊婦には残念ながら死産でしたと告げる、そのくらいが常識であつた、産婆のたしなみの一つであつたとも聞いたことがあります。生命を受け取る産婆さんは、死の使いでもあつたわけです。

西欧中世の社会でも、子どもを遺棄する、森の中に捨てるということがよくあつたらしくて、グリムの童話に「ヘンゼルとグレーテル」というのがあります。捨てられた子どもたちが森の中でお菓子の家を発見するという物語ですが、これなども「子捨て」の風習を反映しているのだとよく言われます。

それでは古代・中世の社会では、障害者のこどもはすべて捨てられ、抹殺されていたのかということ、そうではないと思います。直接的な記述はないのですが、彼らの中にはその社会の有用な一員として、生き抜いていた人々があつたに違いないと思うのです。なぜなら、確たる証拠を挙げることはできないのですが、古代・中世社会には彼らにも役割があつたからです。



これは中世というよりも近世になりますが、中世は絵が下手糞な時代ですのでこんな見事な例はないのです。スペインの宮廷画家ディエゴ・ベラスケス1599-1660の有名な絵、「ラス・メニーナス」です。この絵の右側に見える女性は、マリ＝バルボラという名前も残っています。この絵の約10年後に、中央に立っているお姫様がもう大きくなった絵があるのですが、その絵の背景にも小さくマリ＝バルボラが描かれていて、身体は子どもの大きさのままです。つまり彼女は知的障害者ではなくて、小人症の女性であります。彼女

の右側で犬にちょっかいを出している子どもも、実は子どもではなくて別のタイプの侏儒^{こびと}で、ニコラス・ペルトゥサートと言いました⁵⁾。スペインの宮廷には、一説によれば50人ほど障害者がいて、ベラスケスはその中の10人ほどの肖像画を描いています。中には当然知的障害者もいたと思われませんが、彼らの絵は残っていません。中世は、身分つまり職業の時代ですが、障害者というものにも職業があったのです。目の不自由な方の音楽家（楽師）とかカイロプラティック（按摩）とかは有名ですが、知的障害者の場合は、「道化」でありました。道化は、侏儒（こびと）と知的障害者が多かったのです。人間扱いはされてなくて屈辱的な場合もあったと思いますけど⁶⁾、宮廷道化師の場合は、生活そのものは恵まれていました。マリ＝バルボラも上等のドレスを着ているわけです。ご主人さまにとっては、ベツトみたいなものだったのでしょうが、愛されてもいました。彼らは王家の人々にとって、一番安心できる友人であったという側面があります。

バウアーズの本の中には、ウォルター・スコット1771-1832の書いた『ウェイヴァリー』という小説の中に登場するディヴィッド・ゲラトリーという知的障害者のことが出てきます⁷⁾。彼はブラドワーディン男爵に仕えている従者で、「深い思いやりと人間性、温かな情愛、驚異的な記憶力、そして音楽を聴き取る耳」を持った人物として描かれています。

近代以前の社会は血族や身分が社会構造の基礎をなしていた社会で、その意味では差別が当たり前であった社会です。「総差別社会」であったとも言える。そこには様々な苦しみや悲しみがあったと思います。近代がそれらを否定して、「能力主義社会」を作ったのは正しいのです。しかしその反面、「能力主義」は障害者、特に知的障害者から固有の仕事を奪ったという側面を否定できません。

話を元に戻して、子殺しのことですが、古代においてもそういうことが一般の常識だったとすると、むしろ旧・新約聖書に知的障害児についての言及

5) 大高保二郎『ベラスケス ― 宮廷のなかの革命者』岩波新書 2018年、204頁。

6) 参照。ヨハン・ホイジンガ『中世の秋』（堀越孝一訳）中公文庫、上巻 45頁以下。

7) 『知的障害者と教会』34頁。

がないことこそ、深い意味を持っている、と言えるのかもしれませんが。つまり、人間の間では常識的だった（幼児殺害という）習慣を、聖書は決して正当化はしていないということです。かといって否定もしていない。飢饉のときに、自分たちが生きのびるために、子殺しというようなことが時に行われること、それは否定できない。それを厳しく禁じたならば、もっとひどいこと、家族じゅうが死に絶えるとか、そういうことが起きる。だから神さまはそれをいわば黙認されるのだけれど、それを正当化もしていない。子殺しは、神さまの命令ではないよ。神さまは子どもたちが生きることを望んでおられる。そのようなメッセージがこの沈黙にはあるのかもしれない、と私は思うのです。

エゼキエル書の16章（新共同訳）に、そのことを思わせる箇所があります。こういう言葉です。

『誕生について言えば、お前の生まれた日に、お前のへその緒を切ってくれる者も、水で洗い、油を塗ってくれる者も、塩でこすり、布にくるんでくれる者もいなかった。だれもお前に目をかけず、これらのことの一つでも行って、憐れみをかける者はいなかった。お前が生まれた日、お前は嫌われて野に捨てられた。しかし、わたしがお前の傍らを通って、お前が自分の血の中でもがいているのを見たとき、わたしは血まみれのお前に向かって、『生きよ』と言った。血まみれのお前に向かって、『生きよ』と言ったのだ。』

神は彼らが死ぬことを望んでおられない。私たちの生活が血塗られた生涯であることを、神は否定なさらない。誕生のその瞬間から、私たちは自分の血の中でもがきつづける。しかしその私たちに、神は「生きよ」と言われる。なぜならそもそも生命を与えたのは神だからです。聖書の沈黙には、そのような解釈の可能性があるかもしれない、と私は思うのです。

知的障害者の位置づけのように、聖書に答えが書いていない場合、私たちは聖書の基本的なメッセージに照らし合わせつつ、自分で考えてゆくのです。そしてこの問題について私は、ごく暫定的にはありますが、次のように考えるのです。

4. 知的障害者の社会的位置づけ

聖書にこういう言葉があります。「家造りらの捨てた石が／隅のかしら石になった」(口語訳 マルコ12:10, Mt.21:42, Lk.20:17)。もともとは旧約聖書の詩編118編(22節)の言葉です。今日はそれについて詳しくお話しする余裕はないのですが、これは聖書のもっとも深いメッセージのひとつだと思うのです。「隅のかしら石」とは、石造建築で家造りをする建築家が、まず最初に置く石、家の角のひとつから土台を積み始めるのですが、その最初の石のことです。ちょっと由緒のある建物だったら、その石——礎石が必ずあります。つまりこの聖書の言葉は、私たち人間の建築家が捨てて返り見ないもの、私たちがつまらないものだと思っているもの、そのものからこそ何か新しいものが始まるのだ。神さまはそういう方である。そういう意味です。「家造りらの捨てた石が／隅のかしら石になった。／これは主がなされたことで、／私たちの目には不思議に見える」。

私たちが捨てて返り見ないもの、これは役に立たない、うまくいく可能性はない、そう思ってほかす(関西弁)、くず箱に入れる、捨て去る。しかしそれこそが新しいものの始まりであった。それは多少専門的になりますが、旧約聖書のイザヤ書53章の教えにも通ずるものであり、イザヤ書53章がそうだと、ということは、ある意味では新約聖書の全体が、そこから始まっているとさえ言える言葉であります。

それで私は、知的障害者のことを考えるのですが、近現代という「能力主義」の時代にあって、この時代の全体から取り残され、捨てられているのが、知的障害者だと思うのです。抹殺はされないものの二重三重に取り残された存在になっている。もちろん彼らにも人権は認められているのですが、それはただ認められているというだけで、一般社会の中に彼らの位置づけがないのです。彼らのための仕事がない。彼らの発言する「場所」がない。彼らが人間として生きていくライフスタイルが、一般の認知を受けていないのです。

だからこそ、今のこの時代の閉塞を打ち破って、人間がもっと人間らしく生きていく新しい時代を開いていくための、何かバロメーターのような働き

を、私は知的障害者に期待したいのです。この人たちが、幸せだと感じられるような世界が、私たちの目指すべき新しい社会であるのではないだろうか。それは決して今のような、お金のあふれた世界ではありません。けれども心の豊かな世界です。家族や地域の共同体、人々の心の結びつきが大事にされる社会です。キリスト教会もまた、その地域の共同体の中でこそ働くことができるような社会であります。

最後に一つ言いたいことがあります。

知的障害者について語ることが本当に難しいのは、最初にお話した「能力主義」というものが、私たちの言葉遣いの深いところまで浸透してしまっているからです。そのために、私たちは知的障害者を擁護して、彼らのために語ろうとするときに、彼らの愛らしさ、彼らの善良な性格を、それもまた彼らの一種の能力として語ってしまうという傾向を持っています。それは能動的能力ではなくて、受動的能力、ラテン語では *potentia passiva* といいますが、愛される能力、受け入れる能力、善良な魂、そういったことを強調しがちなのです。しかし知的障害者を「天使のような人々」だと考えるのは間違いです。この本の中でも、そういう「かっこつきで善意の」人々が批判されていますが、それは障害者やその家族を余計に傷つけることがあります⁸⁾。

知的障害者には非常に愛らしい、善良な人々が多いのは確かですが、全員がそうなのではありません。もう本当に憎らしい、頑固な人もいます。また一人の人間が、あるときは天使のようであり、あるときは厄介な悪魔のように見えることもあるのです。

「能力主義」的には語らない、語りたくない。知的障害者を「愛らしい人々」と定義することは、彼らを、「愛すべき人でなくてはならない」と拘束してしまうことになるからです。それは強い障害者差別の裏返しにすぎません。それではどのように語ることができるのだろうか。

その答えは、私にもまだ見つからないのです。

8) 『知的障害者と教会』53, 110頁。

最近、私は長谷川英祐さんという進化生物学者の本を読みました。アリとかハチなどの社会性を持つ生物を研究している方なのですが、『働かないアリに意義がある』というこの本なのです⁹⁾。アリの群れの中には、女王アリとか、雄アリとか、働きアリとか、兵隊アリとか、いろんな役割のアリがあります。その中で働きアリは、常識的に「よく働く」と考えられておりまして、だから「働きアリ」で、英語でも *workers* と言います。そこから「アリとキリギリス」というイソップの寓話もあるわけですが、実際にアリなどを個体識別して長時間よく観察してみると、彼らの群れの中には必ず、ほとんど全く働かない「働かないアリ」がいるそうなのです。巣の中でじっとしている。「自分の体を舐めたり、目的もなく歩いたり、ただぼーっと動かないでいたり」(30頁)、1ヵ月観察しても、2割ぐらいのアリは、働いていると見なせる行動をしない。時には、驚くべきことに一生涯、労働と見なせる行動をしないアリがいるそうなのです。

私たちは、こういう個体は群れのお荷物になっているだけで、無駄だと考えるのですが、長谷川先生は、この働かない働きアリにも、ちゃんと意味があると考えておられるのです。

「不器用な、働きたいのに働けないのろまな個体」が、アリの世界にもあって、彼らがいるからこそアリの世界は全体として正常に動いている、と言える。

これはアリの話であって、そのまま人間に適用できるわけではないと思うのですが、知的障害者の存在も、人間社会の全体にとって必要な、欠くべからざるものなのではないか。私はそのようなことをぼんやりした頭で考えております。

9) 長谷川英祐『働かないアリに意義がある』KADOKAWA, 2016年。